



グローバル・フォーラム会報

THE GLOBAL FORUM OF JAPAN BULLETIN, Summer 2012 Vol.13, No.3

「世界との対話」開催さる 新興国の台頭とグローバル・ガバナンスの将来

グローバル・フォーラムは、中国・復旦大学国際関係公共事務学院、シンガポール・南洋理工大学ラジャラトナム国際研究院との共催で、3月2日東京において「世界との対話：新興国の台頭とグローバル・ガバナンスの将来」を開催した。

当日は、北米、中国、東南アジアからのパネリストを迎えて、国際政治上におけるパワーの分布とその性質の変化について分析しながら、グローバル・ガバナンスのあり方や将来を見通す議論を深めた。

テーマの重要性もあり、会場にはパネリストを含め総勢66名という多数の参加者が詰めかけ、午前、午後の2つの「セッション」で活発な議論が交わされた。2つの「セッション」では、計9名のパネリストによる基調報告が行われたが、その概要は、つぎのとおりであった。



議長を務める神谷万丈防大教授（中央）

スマート・パワー時代

セッションⅠ「スマート・パワー時代におけるグローバル・ガバナンス」では、まず中西寛京都大学教授から「自由主義的な秩序が揺らいでおり、先進国と新興国との間で激しい価値をめぐる権力闘争が起きる可能性がある。グローバル・ガバナンスにおける日本の

ステータスは、日本が今後、スマートな戦略をとり得るか、自国の資源をうまく活用できるかで定まる」との、次にジョン・カートン・トロント大学教授から「グローバル・ガバナンスへの需要が世界的に高まっている中で、国連からの供給はほとんどなくなった。これは国連自体が1945年当時の世界を反映した国際機関だからだといえる。21世紀には、新たなグローバル・ガバナンスのデザインが求められる」との、3番目に宮岡勲慶應義塾大学准教授から「グローバル・ガバナンス研究は、パワーなどの国際政治学における伝統的な問題を軽視する傾向にあるといえるが、新興国の台頭とパワーの問題は切り離せない」との、最後に石川卓防衛大学校准教授から「パワートランジションが進むのであれば、新興国を主体に含むような新たな核抑止の秩序を再編しないとイケない」との、基調報告がそれぞれなされた。

グローバル・ガバナンスの今後

セッションⅡ「新興国からみたグローバル・ガバナンス」では、まず川島真東京大学准教授から「ここ数年、中国国内では、グローバル・ガバナンスに関する議論が高まっている。中国は、グローバルな領域における秩序作りへの関与と、地域に対する関与の仕方が異なる可能性があり、中国は場合分けをしてくるのではないかと、次に播忠岐復旦大学教授から「中国はグローバル・ガバナンスを必要とし、グローバル・ガバナンスも中国を必要としているが、グローバル・ガバナンスについては誰が、何を、どのような



活発に議論する参加者たち

目的で、いかに実施するのか、という4つの疑問がある」との、3番目に大庭三枝東京理科大学准教授から「東南アジア諸国は、ASEANという組織での地域協力によりグローバル・ガバナンスに関与できる。今地域単位での協力や統合が進められているが、地域ガバナンスと、グローバル・ガバナンスがどういう関係にあるのか、注視しなければならない」との、4番目にタン・シーセン南洋理工大学准教授から「グローバル・ガバナンスの性格や特徴を考えると、小国の利益、国益は矮小化されてしまうのではないかと、最後に細谷雄一慶應義塾大学教授から「日本の役割としては、民主主義や法の支配、人権といったリベラルな理念を、西側諸国と協力していかに太平洋地域に広げるかが重要である」との、基調報告がそれぞれなされた。



閉会挨拶をする大河原代表世話人（中央）

議論百出から

当フォーラムのホームページ (<http://www.gfj.jp>) 上の政策掲示板「議論百出」への最近3ヶ月間の投稿論文を代表して、下記論文を紹介する。

「世界との対話」に出席して

早稲田大学教授 池尾 愛子

3月2日に、グローバル・フォーラムが復旦大学(中国)、南洋理工大学(シンガポール)と共催した国際シンポジウム「世界との対話：新興国の台頭とグローバル・ガバナンスの将来」が都内で開催された。詳細は、本紙1面の報告記事に譲るとして、ここでは、会議に参加した者の一人としての私の感想を述べてみたい。対話は2つのセッションに分かれ、第1セッションの「スマート・パワー時代のグローバル・ガバナンス」では、先進国によるこれまでの議論を振り返った上で、将来について議論するという啓蒙的な側面が見られた。国連、国連安保理、NATO、G7/8、G20という枠組みを再確認

するトロント大学のジョン・カートン教授の議論はわかりやすかった。

第2セッションの「新興国からみたグローバル・ガバナンス」の議論からは、ASEAN加盟諸国の多様性とダイナミクスが生き生きと伝わってきた。また、中国復旦大学の潘忠岐教授が、カナダから来たジョン・カートン教授の報告に共感を示したのも、印象的であった。そのような共感の広がり、グローバル・ガバナンスの基盤を構築してゆくのであろう。同じグローバル・フォーラム主催の2月24日の「日米中対話」と補完しあう意味もあると思われる。

(2012年3月3日付投稿)

最近3ヶ月間で注目されたその他の論文

- 5/20 「世界ウイグル会議は『蟻の一穴』になるか」(六辻彰二)
- 5/14 「プーチン大統領がG8サミット欠席を決めた本当の理由は？」(飯島一孝)
- 5/3 「メデーのOWS運動を思う」(島 M.ゆうこ)
- 4/22 「わが国の北朝鮮制裁の限界」(緒方林太郎)

- 4/19 「中国ではロケット残骸物の落下は日常的な出来事」(酒井信彦)
- 4/3 「消費増税より相続資産からの課税強化を」(鈴木亘)
- 3/20 「『日・ASEAN対話』は、『海洋』だけではなく、『空間』も議論せよ」(松井啓)
- 3/15 「原発の安全対策を急げ」(湯下博之)

混迷するシリア情勢

3月27日、ダルウィッシュ・ホサム・アジア経済研究所中東研究グループ研究員は、当フォーラムの第77回外交円卓懇談会において、「アラブの春と混迷するシリア体制」と題し、つぎのとおり語った。

主にシリア軍の離反兵で構成される「自由シリア軍」は組織化されていない。「地域間調整委員会」は反体制派と国際

メディアを結び付ける活動を行なうとともに、反体制派の国民に対し指示を与えている。

現在のところ、シリアではだれからも何らの政治的解決も示されていない。このままの状況が続けば、体制側と反体制側の両方からの国際的干渉を招くことになるだろう。

フォーラム活動日誌(3-4月)

- 3月1日、5月1日 『メルマガ・グローバル・フォーラム』発行
- 3月1-2日 世界との対話「新興国の台頭とグローバル・ガバナンスの将来」(John KIRTON トロント大学教授他65名)
- 3月13-14日 「日・ASEAN対話：ASEAN統合の未来と日本の役割」(Clara JOEWONO 戦略国際問題研究所財団副理事長等101名)
- 3月27日 第77回外交円卓懇談会 (Housam DARWISHEH氏他16名)
- 4月1日 『GFJ E-Letter』発行
- 4月24日 第78回外交円卓懇談会 (Nissim BEN SHITRIT 大使他23名)

中東情勢の新展開

4月24日、ニシム・ベンシトリット駐日イスラエル大使は、当フォーラムの第78回外交円卓懇談会において、「中東情勢の新展開」と題し、つぎのとおり語った。



熱く語るベンシトリット大使(中央)

ユダヤ人入植地に関する問題は、パレスチナとの和平構築において、大きな障害にはならないだろう。なぜなら私たちは、入植地問題の最終的な解決が、入植を止め、撤退することだと知っているし、それを行う準備も出来ているからである。実際、私たちは、ガザ地区からすでに撤退している。

しかしパレスチナ側は、この入植地問題を直接的な交渉に入る前の「前提条件」として位置付け、直接対話自体を拒否している。しかし、真の平和は、当事者同士による直接的な対話によって初めて達成される。国連による一方的な方策は真の解決をもたらさない。



グローバル・フォーラム会報
2012年夏季号
(第13巻 第3号 通巻第51号)

発行日 2012年7月1日
発行人 伊藤 憲一
編集人 高畑 洋平

発行所 グローバル・フォーラム
〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-12-1301
[Tel] 03-3584-2193 [E-mail] gfj@gfj.jp
[Fax] 03-3505-4406 [URL] http://www.gfj.jp/